

都ぞ弥生

(明治四十五年寮歌)

横山芳介君 作歌
赤木顕次君 作曲

一 都ぞ弥生の雲紫に

花の香漂ふ宴遊の筵

尽きせぬ奢に濃き紅や

その春暮れては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに

燃えなん我胸想ひを載せて

星影冴かに光れる北を

人の世の清き国ぞとあこがれぬ

二 豊かに稔れる石狩の野に

雁遙々沈みてゆけば

羊群声なく牧舎に帰り

手稲の嶺黄昏こめぬ

雄々しく聳ゆる檜の梢

打振る野分に破壊の葉音の

さやめく蜩に久遠の光り

おごそかに北極星を仰ぐ哉

三 寒月懸れる針葉樹林

櫓の音凍りて物皆寒く

野もせに乱る清白の雪

沈黙の暁霏々として舞ふ

ああその朔風颯々として

荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ

ああその蒼空梢聯ねて

樹氷咲く壮麗の地をここに見よ

四 牧場の若草陽炎燃えて

森には桂の新緑萌し

雲ゆく雲雀に延齡草の

真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光

小河の潯をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉

春の日のこの北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り

平原果てなき東の際

連なる山脈玲瓏として

今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術を懷みつ

高鳴る血潮のほとばしりもて

貴とき野心の訓へ培い

榮え行く我等が寮を誇らずや